

塩の道

金沢の平潟湾沿岸では鎌倉時代から明治時代にかけて製塩が行われ、この地域の重要な産業となっていました。中世には金沢から鎌倉へ朝夷奈切通を通して盛んに塩が運ばれ、この道筋が「塩の道」と呼ばれていました。

金龍禅院

昇天山。飛石山。臨済宗建長寺派。本尊は宝冠釈迦如来。南北朝期に創建されました。

境内には「九覧亭」が平潟湾の中にあたかも島のように突き出た崖の上にあります。ここからは「金沢八景」の他に平潟湾が一望のもとに見られたといえます。江戸末期には文人墨客など観光客でにぎわいました。

本堂の後ろに「飛石」と呼ばれる大きな石があり、伊豆の三島明神が御幣となって飛来したという伝説があります。飛石は文化9年(1812)の地震で昇天山の山中から落下し元の形が失われています。

金沢藩陣屋跡

武州金沢藩(米倉氏)は、現在の横浜市域で唯一の大名でした。先祖は甲斐の武田家に仕えた武将ですが、武田家滅亡の後、徳川家の家臣になりました。大名になったのは三代米倉昌尹(マサカネ)の時代です。昌尹は五代将軍綱吉の側衆の一人で「生類憐れみの令」の遂行で評価を高めました。

享保7年(1722)、下野国都賀郡本皆川村からここ金沢六浦の地に陣屋を移し金沢藩が成立しました。それ以降、明治4年(1871)の廃藩置県まで金沢藩(六浦藩)は存続しました。石高は12,000石でした。

上行寺東遺跡

昭和59年(1984)、ここにあった大規模な中世のやぐら群が注目を集めました。やぐらとは鎌倉時代に崖や洞窟に造られたお墓の形式です。調査の結果、43基のやぐら、6基の建物跡、400基の五輪塔、200体のにぼる人骨が発掘され、鎌倉時代の貴重な遺跡と確認されました。マンションの建設により、その大部分は失われました。今はやぐらの一部を残すのみです。他は復元模型です。ここからは昔の六浦湊全体と塩場跡を見下ろすことができます。

上行寺

六浦山。日蓮宗中山法華経寺末。本尊は日蓮上人尊像です。開山は日祐上人、開基は日荷上人。

日蓮上人と下総の千葉氏に仕えた富木常忍(トキヨシ)が鎌倉への途次、船中で議論して六浦着岸後もこの寺で議論を続けたという船中問答の伝えがあります。常忍はその後、日蓮宗に帰依し中山法華寺を開山しました。称名寺の和尚と囲碁で仁王像を賭け、勝って仁王像を背負い3昼夜歩き通して本山の身延山久遠寺におさめた日荷上人の伝説も伝えられています。境内には日荷上人が身延山から持ち帰り植えたといわれる樹齢700年もの榎(カ)の木や、牛馬六畜の供養塔(鎌倉時代)があります。

塩場跡(ソバアト)

江戸時代には光傳寺の門前まで海が入り込んでいて、この辺りの浜では盛んに製塩が行われていました。京急六浦駅周辺には、かつて塩場と呼ばれたところがありました。歌川広重の金沢八景の版画『内川の暮雪』には沿岸の塩焼き小屋(釜屋)の情景が描かれています。六浦における塩の生産は明治37年(1904)、日露戦争の戦費調達のために塩の専売法が成立するまで続きました。

光傳寺

常見山。無量院。浄土宗。本尊は阿弥陀如来。天正元(1572)年に創建されました。本尊の阿弥陀如来像の首は春日の彫刻、体が運慶の作と伝えられ、面白い昔話とそのいきさつを伝えています。また、このお寺には永仁2年(1294)に造られた木造の地藏菩薩があります。作者は増慶で、県の重要文化財です。

宝樹院

高栄山。高照寺。真言宗御室派。本尊は大日如来。開山は不明です。阿弥陀堂に安置されている阿弥陀三尊像は、平成2年の修理で体内から納入品が発見され、久安3年(1147)に創建された常福寺(称名寺末・廃寺)の本尊であったことが判明しました。この阿弥陀三尊像は平成4年に県の重要文化財に指定されました。

鼻欠地藏

鼻の先が欠けていたので鼻欠地藏とよばれてきましたが、武蔵と相模の国の境界にあったので「界(カ)の地藏」とも呼ばれていわれました。『江戸名所図会』には岩に刻まれた地藏像が描かれていますが、現在は風化と浸食が進み、その存在に気がつかないほどになってしまいました。

朝夷奈切通(アサヒナキトウ・アサヒナキト)

鎌倉から六浦湊への道には急峻な朝比奈峠という難所がありました。この道は軍事的・政治経済的に重要だったので、三代執権北条泰時は、仁治元年(1240)、この峠の開削工事を命じ、自ら馬で土砂を運び工事を指揮したと言われています。峠の頂上付近が「大切通」、それより金沢寄りを「小切通」と言います。中世の姿を残す遺構として昭和44年(1969)に国史跡に指定されました。

光触寺

岩殿山。時宗。本尊は阿弥陀如来。真言宗でしたが弘安2年(1279)一遍上人を開山として時宗に改めました。本尊は、「頬焼き阿弥陀」の別名があり、鎌倉前期の作と伝えられています(国重文)。境内の「塩嘗(ソバノ)地藏」はもと光触寺橋のたもとにありました。金沢の塩商人が鎌倉への途次、この地藏に塩を供えたと帰途にはなくなっていたのでこのように呼ばれました。